

公開学習会「学校現場におけるセクシュアル・マイノリティ」実施報告

両性の平等に関する委員会 セクシュアル・マイノリティPT

1 概要

2014年12月10日（18時～20時）弁護士会館にて、両性の平等に関する委員会セクシュアル・マイノリティ・プロジェクトチーム（以下「セクマイPT」という）は、学校現場において、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）などのセクシュアル・マイノリティの子どもたちがどのような支援を必要としているのか、周りの大人たちには何ができるのかを考えるため、「知ろう 考えよう 学校現場におけるセクシュアル・マイノリティ～受け止めて、ありのままの子どもたち～」をテーマに、教員や保護者などの学校関係者を招いて公開学習会を開催した。前半は、トランスジェンダー当事者としての自らの体験をもとに、子どもたちの支援活動や教育関係者への研修活動に長年携わっている、「いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」共同代表の遠藤まめたさんに講演を行っていただき、後半は、委員と参加者を交え、参加者が日頃抱えている質問や問題点について意見交換会を行った。

年末の多忙な時期にもかかわらず、学生など、教育関係者または東弁会員以外の参加者も多く、出席者数（委員以外）は54名にもものぼり、予想以上の盛況となった。

2 遠藤まめたさんの講演

講演では、学校現場におけるセクシュアル・マイノリティをテーマとし、多様な性の基礎知識、子どもたちの状況、大人にできることについてお話しいただいた。

多様な性の基礎知識においては、生物学的な性（からだの性）、性的指向（誰が好きか）、性自認（こころの性）といった「性」の構成要素について解説してもらい、性的指向と性自認の2つは別物で次元が異なる概念であることも説明いただいた。ゲイ・レズビアン（同性が好き）及びバ

イセクシュアル（同性異性のどちらも好き）は性的指向に関する概念であり、全人口の約3～5%であるとも言われている。この割合は、左利きの人口とほぼ同じである。また、男の身体として生まれたが女として生きたい、または女の身体として生まれたが男として生きたいという性同一性障害は、性自認に関する概念であり、数百人から数千人に1人の割合で存在する。

子どもたちの状況については、ゲイ・バイセクシュアル男性の65%が自殺を考え14%が自殺未遂を起こしており、50%はいじめ被害の経験があった。性同一性障害を有する子どもの4人に1人が不登校である。自身がセクシュアル・マイノリティであることを誰にも言えなかった割合は、女子で31%、男子で53%であった。セクシュアル・マイノリティ全体に共通して、子どもたちは非常に困難な状況に置かれやすいが、周囲の大人はセクシュアル・マイノリティの子どもを見過ごしてしまうことが多く、そのために子どもたちの困難は解消されずより深まるおそれがある。

大人にできることは、子どもからの相談前の対応では、セクシュアル・マイノリティであるかもしれないと自覚した子どもがそのことを言わなくても安心できる環境や、いざ言いたい気持ちになった場合に躊躇なく言い出せる環境をあらかじめつくっておくことである。例えば、学校内にセクシュアル・マイノリティに関する本やチラシをさりげなく置いたり、ポスターを張るなどして図書館や保健室を活用すること、授業の中でセクシュアル・マイノリティに対して肯定的な情報を生徒に伝えること、学校内でのセクシュアル・マイノリティに対する差別的なジョーク（いわゆる「ホモネタ・レズネタ」）を放置しないなどの対処が挙げられる。セクシュアル・マイノリティ当事者の生徒から実際に相談を受けた際の対応は一人一人異なるものの、「話してくれて、どうも

ありがとう」とカミングアウトしてくれたことに対してまずは感謝の意を表すと良い。そして、「どんな気持ち?」、「困っていることがあるの?」などと本人に対し受容的に訊いていくことが重要である。

参加者が公開学習会に参加した動機の中には、セクシュアル・マイノリティに関する知識を身に付けたい、理解を深めたい、当事者の生徒の気持ちを知りたいといったものもあり、上記講演は参加者にとって有意義なものであったはずである。

3 意見交換会

講演の後には、参加者から当日募った質問や日頃悩んでいる問題点について、委員と参加者が共に10人程度のグループごとに分かれ意見交換会を行った。挙げられた質問や問題点の一部としては、「学校で生徒からアンケートを取る際、男か女かをよく聞いているが、聞かないということも考えられるところ、どのような選択肢を設ければよいか」、「トランスジェンダーの子どもの服装はどうすべきか」、「LGBTのことも含んだ性教育の授業を昨年実施したが、他の生徒からLGBTを嫌悪する反応が授業中あり、その際どのように対処すべきであったか」等があった。

上記各質問や問題点の意見として、校内アンケートの性別記入欄に関しては、「これまでセクシュアル・マイノリティの存在を認識してなかったため何も意識せずに性別を聞いていたが傷つく生徒もいるため、性別を聞く必要のない時は聞かないようにしたり、性別を答えないという選択肢も設けた方がいいのでは」といったものが挙げられた。制服に関しては、「教師はトランスジェンダー当事者の生徒が周囲にカミングアウトしなくても、当該生徒が適切な服装を着用できるように配慮すべきである」といった意見が出た。

性教育中の生徒からの心無い言動への対処法については、「先生は『気持ち悪くない』と諭して教師がセクシュアル・マイノリティに肯定的である姿勢を示したり、同性愛については『誰を好きになるか』を他人と比べる必要はないことを教えた」といった手法が参加者から紹介された。

教員を中心として日頃から学校現場におけるセクシュアル・マイノリティに関して疑問や問題点を抱えている方は多く、終了時間まで活発な意見交換がなされた。セクマイPTとしては、学校関係者から現に悩んでいることや現場の状況を把握することができた。学校現場におけるセクシュアル・マイノリティについて話し合える場はまだ多いとはいえないところ、今回の意見交換会は委員だけでなく参加者にとっても貴重な機会であったと思われる。

4 総括

学校現場におけるセクシュアル・マイノリティの子どもに対する支援は現時点では決して十分とはいえないが、当事者である子どもの存在を意識することで、これまで見過ごされてきた点が問題として認識されるようになり、セクシュアル・マイノリティに対する学校関係者の意識が高まっている状況が確認された。しかしながら、学校関係者も適切な対応方法をまだ十分に確立できておらず、引き続き問題点を共有し検討していくことが必要であると実感した。

公開学習後参加者に記入いただいたアンケート結果では、講演及び意見交換会共にほとんど全員から好意的な評価をいただいた。今回のような機会の場を継続して設けてほしいとの要望もあり、セクマイPTとしては、今後も引き続き学校現場も含めたセクシュアル・マイノリティの方々に対する支援に取り組んでいく所存である。